町長室からこんにちは

No.80

一宮町長
馬淵 昌也

先般、自衛隊OBのお二人の専門家の方に、一宮町に残る第二次世界大戦の戦跡について、詳しく教えていただく機会を得ました。

太平洋戦争末期、サイパン・グアムをアメリカに攻め落とされた日本は、本土決戦に備えて作戦を練ったのだそうです。当時、北関東には陸軍の精鋭の部隊がなお残っており、この部隊を主軸に首都防衛を図りました。アメリカ軍は、相模湾か九十九里浜に上陸して東京を狙うだろうと考え、九十九里浜にターゲットを絞って、敵を迎えうつ用意を1944年から始めたそうです。

旭市の飯岡と、いすみ市の太東の2地点を南北の門柱とし、東金に中心を置いて、敵の上陸を防ぐための準備が行われました。当時すでに東金には、海岸付近から町へむけて戦車が通れるレベルの堅固な道路があったので、米軍はここを攻略して、一挙に東京へ進軍するだろうと推測して、その防衛を大変重要なものと考えました。九十九里浜のその他の地域は砂浜や低湿地で、戦車などの走行には耐えない地域だったのです。

一宮の陣地は、太東岬に設けられた大砲が、太東港や東浪見・一宮の海岸にやってくるアメリカの艦艇を攻撃するのと相まって、茂原の飛行場にやってくるアメリカの飛行機を大砲で撃墜するのが主任務でした。また、その砲座を守備するために、敵の兵士が近づけないように、多くの銃座が設けられ、接近する敵兵を狙撃する用意がなされていたそうです。

当時、一宮の陣地には約3千名の兵士が駐屯して戦闘に従事する計画でした。その頃の一宮町の人口は1万人もいなかったでしょう。もし、実際に米軍との地上戦が行われていれば、沖縄戦のような悲惨な展開になったことが予想されます。地元の被害は、甚大なものになったでしょう。そういう意味では、昭和天皇が本土決戦前にポツダム宣言受け入れを決意されたのは、本当にさいわいだったと思います。

戦争はなにをおいても避けなければなりません。改めて強く心に銘記した、貴重な機会でした。